2017 年度　発達心理学会国際研究交流委員会公開講演会　講演記録

2017 年 11 月 4 日

講演者：Stephen Russell（テキサス大学）
司会者：戸田 有一（大阪教育大学）
通　訳：葛西 真記子（鳴門教育大学）

アメリカにおける LGBTQ 若者当事者といじめ：安全かつ支援のある学校づくり
LGBTQ Youth and Bullying in the U.S.: Strategies to Create Safe & Supportive Schools

１．はじめに

今日ここに来られてとても嬉しく思っています。本当にこのような機会をオーガナイズしていただいて，浦田先生，日本発達心理学会，戸田先生，葛西先生に感謝しています。

20 年前に，今日お話するような LGBTQ，若者に関する研究，いじめの研究を始めたのですが，20 年後にこうなっていることは予想していなくて，日本に来てお話できることを嬉しく思います。今日は広く研究を紹介するのですが，ひとつは LGBTQ といじめについて，肯定的な雰囲気を作るにはどうしたらいいのか，お話していきたいと思います。研究として紹介するものは共同研究者と一緒にやっているものもありますので，そういった研究もお話していこうと思っています。アメリカはすごくカジュアルな感じで，途中で手を挙げて発言したりするんです。だから途中で研究のことでわからないな，もうちょっと知りたいなといった質問があったら，ためらわずに手を挙げてください。途中で休憩をとって，質問をお受けします。最後の方にもまたお受けする予定です。

アメリカにおいて，LGBTQ 以外で人の一生くらいの間に劇的に変わるという課題は他に考えられません。私が 10 代のころ，10 代の LGBTQ の人たちは（見えて）いませんでした。今はアメリカの高校で，10 代の子のゲイがいないという学校はありません。昔はカミングアウトしていなかったからゲイというのはいなかったんですね。今日のレクチャーは，三日間のワークショップのなかの一日です。ワークショップの中ではもっと詳細な話をしていますが，セクシュアルマイノリティの子どもたちが，社会的な変化もあって，若い段階でカミングアウトするようになってきました。社会的に受け入れられるようになった反面，スティグマとか偏見もあります。少し前は大人しかセクシュアルマイノリティの人はいなかったため，大人が偏見を経験してきましたが，今は 10 代でカミングアウトする人が増えているため，10 代で偏見や差別を経験している人が増えてきました。25～30 年くらい前から学校で，若者がカミングアウトをして問題になったり，いじめが起こったりということが起こってきました。先生はその問題に対してどうしていいかわからなくて困るという状況になりました。若い子がカミングアウトしていじめられる事態が発生します。いじめというのは，それ自体でネガティブな影響がおこったりしますよね。

私自身が興味を持っているのはセクシュアルマイノリティへのいじめで，それ以外にもいじめの課

題はたくさんありますが，そこを中心的にやってきています。いじめのスタイルもたくさん出てきて，ネットいじめというのも出てきました。ネットいじめは，大人が見ていないし関わっていない，そういったところで起きています。10 代から大人になる過程において発達的にいじめがどう変わってくるのかという研究もあります。ですので，差別，ネットいじめ，その発達的パターンという 3 側面の研究を紹介するのと，それがどうして重要なのかを提示したいと思います。アメリカで健康や健康保険といった問題にも関係してとても重要なことなのです。そして，それに対して何ができるのか，戦略があるのかについても話していきたいと思います。

２．LGBTQ と差別的ないじめ

こういうテーマでレクチャーをすると，「なぜ，LGBTQ になる人がいるんですか」という LGBTQ の原因みたいな質問がありますが，それは私の関心のあるところではありません。私の関心は，今若い子たちに LGBTQ の人たちがたくさんいて，その人たちが学校でいかにいい環境で過ごせるかということなのです。さきほども，いじめというのがいま世界中で関心を集めていると言いましたが，ある本を紹介したいと思います。昨年，ナショナルアカデミーオブサイエンスから出た本です。このナショナルアカデミーというのは国に対してデータを提供するすごく重要な調査をする機関で，その結果がどれだけ大切かということなのですが，この中には，たとえばアルツハイマーや温暖化などの環境のことなど，いろいろな国にとって重要なデータがあります。だからナショナルアカデミーがいじめに焦点化したというのはとても重要なことです。この中でどのような話題が取り上げられているかというと，いじめが社会的な文脈のなかでどうやって起こっているのか，いじめられた結果どうなってしまうのかといったことが触れられています。ですが，この中では，いじめの動機については，関心が寄せられていませんでした。2000 年代にアメリカの各州や地方の法律政策は作られているのですが，そういった情報は入っていないのです。法律や条例が作られてはいるが，何に対する差別をしているのかということについて焦点を当てているものはありません。なので，私は，何とかそれについて明らかにしようと思っています。

これは，カリフォルニアの中 1 から高 2 くらいまでの子どもたちのデータです（スライド５）。カリフォルニアは，映画やテレビからだとサンフランシスコかロサンゼルスが有名ですが，残りの地域は農業が中心で，アメリカの中でも一二を争う肥沃な農業地帯です。なので，社会的，政治的，経済的に多様な州でもありますが，2009 年のデータでは 23 万 4947 人の子どもたちのうち，三分の一以上の子どもたちがいじめられていたということです。「いじめられていましたか」という質問の次に示すのは「何故いじめられていましたか」という理由ですが，差別的な「ゲイだと思われて」などといった原因や，関連して心身の障害に関する原因も含まれています。その，三分の一の中のさらに四分の三は差別的なことが原因でいじめられているということがわかります。75 パーセントは差別的なことでいじめられているのに，条例や予防など対策に一切含まれていないというのが問題です。

3 年前に日本に来たときに，同じようなデータを紹介したのですが，そのとき話題になっていたのは，男の子が自殺したという事件で，その子が実は韓国系の子だったことは一切報道されていなかったということでした。たくさんのいじめが起こっていますが，いじめの原因は差別的なことなんです

ね。

偏見や差別に基づいたいじめがどれだけ影響を与えるかということを資料で示したいと思います。このグラフは，いじめられてなかった人，いじめられているけれど偏見が原因ではない人，偏見が原因でいじめられていた人の比較です。一番最後を見てほしいのですが，学力に関しては，バイアスに関わらないいじめというのは，いじめられていない人と変わらないです（スライド６）。たくさんの種類のアルコールをいっぱい飲むというのも変わりませんが（スライド７），ブルーのところ（差別によるいじめのあるグループ）はかなり高くなってきています。「安全だと思えなくて学校に行こうと思わない」という質問では，かなり違いますよね（スライド８）。武器で脅されたというのも同じです（スライド９）。抑うつや腹痛といった症状も，LGBTQ は高くなっています（スライド 10）。

初めのほうからずっと見てみますと，人種，性別といった差別を受けた人が高かったと思うんですが，LGBTQ と障害のいじめが，一番こういったスコアが高くなっています。昨日のワークショップに来られた参加者のなかで自閉症の研究をしているという方がいましたが，ここでも障害を持つ子どものスコアが高くなっていて，学習障害のお子さんのいじめが一番高くなっています。

【質問】グラフ中，ノットバイアスの意味は？

【答え】ノットバイアスですが，力関係の違い，上の子が下の子をいじめるような感じ。いじめられている子に差別されるようなことがないようないじめ。大きい子が小さい子をいじめるような感じ。対人関係で目立ちすぎ，といったことでのいじめであって，宗教，人種，ゲイっぽいからというような原因でのいじめではない，という意味です。バイアスと偏見はほぼ同じ意味と理解していただければ大丈夫です。

３．差別的ないじめの影響

ここでは見せていないですが，中にはいくつか重複している方がいて，いくつかの原因で差別されているということがあります。つまり，少数の人種とレズビアンでといった，いくつかのいじめの原因とされているものを持っていると，いじめられるリスクは高くなっているという結果も出ています。

次はネットいじめについてですが（スライド 11），たいていは匿名だと思いますが，そうであるとより残酷で攻撃的な行動を許してしまうという特徴があります。面と向かったいじめよりもより広くいきわたってしまいます。全然知らない人まで，自分の人間関係全体に，いじめの範囲は広がってしまいます。そして，証拠やネットの投稿はおそらく永久に残ってしまうのではないかと思ってしまうのです。ここで，参加者の方に質問です。何人の方が携帯をもって寝てしまうか手を挙げてください。年齢によって変わるかもしれませんが，若い人たちだと多いかもしれませんね。若い人でネットいじめを経験したことがある人は，このように，いじめられながらベッドで寝ているという状況だとわかってもらえると思います。10 年前にネットいじめが始まったときは，それが直接的でなく実際に会っていないからそれほど酷くないと思われていました。

ではここで，ネットいじめと差別についての関係を示したいと思います（スライド 12）。このグラフから，データを出すために私があちこちリサーチしていることが分かってもらえると思いますが，

ウィスコンシン州の小さな町のデータです。最初のデータは学校に行かない，とはいっても日本の不登校とは少し違って，学校に行くのが怖いから行かないという率を示したデータですが，一番左が〈いじめられていないしネットいじめもない人〉，次が〈ネットいじめではないけれどバイアスに基づいていじめられている人〉，その次が〈ネットでいじめられていないけれどバイアスによっていじめられている人〉，最後が〈ネットいじめでかつバイアスに基づいたいじめを受けている人〉です。これを見ると，抑うつ，自傷行為，自殺企図になると一番最後のところがすごく高くなっていることがわかると思います。その差別がソーシャルメディアと一緒になるとかなりリスクが高くなるということです。これはすべて発達的に年代が上がっていくと変わっていきます。次のデータはずっと同じグループを何年か追っていった調査ですが（スライド 13），それぞれ 13 歳から追っていったデータです。これをみると，いじめは年齢とともに下がっています。中学生時代が一番ひどいですね。どこの国もおそらく同じでしょうか。もう一つ注目してもらいたいのはセクシュアルマイノリティかそうじゃないかということの違いで，中学生の時も大きかったが 20 歳になってもやはり差があります。13 歳の時，ゲイやバイセクシュアルと異性愛の男の子との間で差がある。全体的に下がっていきますが，20 歳になってもやはりその差があります。日本ではどうでしょうか。

他の人たちがデータを見ていうのには，20 代になると，目に見えるいじめではない形で人間関係を避けるなどの，見た目ではいじめとはわからない形でしているのではと考察している人もいます。なので，20 代になったからといって同性愛に対する嫌悪や偏見がなくなったわけではなく，形が変わっただけのように思います。

日本とアメリカの大きな違いですが，アメリカは 1960 年代から性的指向（LGB）に対する一般の認識が高くなり，セクシュアルマイノリティの関心が高まり，その文化やアイデンティティといったものに注目が集まって，最近になってようやく，トランスジェンダー（T）について関心が高まってきたところなので，その辺が日本と違うところでしょうか。それは 5 年前くらいからです。それまでは性別に違和感を持つ人たちのことは個人的な問題とされていて，最近になって性別に違和感を持っている人たちがいるんだということに注目が集まってきました。

【質問】調査方法について質問。個別の聞き取り調査なのか，客観性と主観性について気になる。いじめられていても自覚のない子どもがいる。

【答え】イギリスの質問紙調査で正確性や客観性，信頼性については，いろいろな研究で示されていて，92.8%は正確に測っているという研究結果が出ています。それ以上はわかりません。このデータの調査を行った研究者も質問紙調査の妥当性などを研究している方なので，信頼性はあると思います。

【戸田補足】いじめの調査は自己報告質問紙が多いです。外国ではピア・ノミネーション（仲間指名）も多く，教師による評定もあります。ただ，「誰がいじめられているか」を尋ねるなどして，正確さを求めれば求めるほど，回答する子どもたちを傷つける可能性も上がってしまうので，それとの兼ね合いによるため，日本ではほとんど行われていません。

【質問】これはイギリスの調査なのか。すると，高校入学という環境の変化によっていじめの減少が

起こっていることなのか。

【答え】質問の通り，16 歳と 17 歳が高校に入る時なので，これはイギリスのデータですが，アメリカでも同じような結果になっています。

【葛西補足】性的指向と性自認については理解があると思って話してもいいでしょうか。性的指向とは，同性の人たちを好きになったり，好きな人が同性も異性もだったりするといったことです。トランスジェンダーとは，自分の性に違和感がある人のことで，その人の中には異性愛である人もいるし同性愛である人もいるということです。自分自身の性の問題と好きになる相手の性には違いがあるということです。

2017 年にカリフォルニアで行われた大きなサンプルのデータです（スライド 14）。「あなたはトランスジェンダーですか」に「はい」「いいえ」で答える質問で，「はい」を選んだ人の中で自殺を考えたことがあると答えた人は，「いいえ」と答えた人よりも 3 倍多かったのですが，その中でもいじめを経験したことがある人を統制すると，リスクは劇的に減少しました。まだ 2 倍近くトランスジェンダーでないと答えた人よりも多いけれども，いじめの要因を除外するとこのように減少しています。アルコールやたばこ，マリファナについても，いじめがもしなかったら下がるという，同じパターンが見られます。これは最近出たばかりの研究結果なのですが，興味がある方がいれば提供します。

【質問】この縦軸は%でないのか

【答え】オッズ比というものです。

4．前半のまとめ

ここまでをまとめますと（スライド 15），いじめられたと報告した子について，その動機（の認識）が差別や偏見に基づいていたということです。いじめの影響はこれらの動機のときにすごく悪くて，差別的偏見に基づいているいじめは，心理的，行動的なことに影響を与えます。学業にもいくらか影響を与えますが，学業よりも行動的なことに影響を与えます。学業成績にあまり影響がないという理由は二つの理由が考えられて，一つはいじめられることによって学校に行かなくなること，もう一つは，いじめられてずっと先生と一緒にいるなど，学業に専念するタイプがあるんですね。それを平均するとあまり影響がないということになります。そして，ネットと差別の両方のいじめがあるとき最も悪影響があって（スライド 16），年齢が上がるにつれてその率は下がるけれども，LGBT の格差は成人前期までずっと続いています。いじめを減らすと，全体的に若者たちの健康のリスクを減らすことができます。

なぜ差別的なことを問題にしなければならないかというと（スライド 17），差別というのは個人差で人を除外するということだからです。つまりその人の属性，持っているもので差別をしてしまうからです。いじめの影響というのは，この研究では個人の心理的な問題にも焦点を当てていますが，それは実際には対人的な関係や実際の学校環境全体にも影響を与えます。そして，ここで言いたいのですが，世界的にも影響を与えます。例えば偏見的な思想を持った大統領がいたとするとですね。

後半で話をしたいのは，それぞれ心理的・対人関係・社会というレベルで，何ができるか，どういうことをしたらいいか，です。例えば，安全な学校環境を作るだとか教員研修だとか，インクルーシブなポリシーを作るとかについてお話していきたいと思います。

それではここで時間をとって，質問やコメント，皆さんそれぞれのおかれている環境や学校など，それぞれによって関係するのか，意味をなすのかなどをお聞きしたいと思います。

【ここで会場は自由討議】

【質問】「行動的健康」という概念についてどういう意味なのか。

【答え】これは「リスクのある行動」という意味で，例えばたばことか酒を飲むとかを指します。昔から心理的面と行動面とを分けていますが，これは，全部含めたリスクのある行動を指します。自殺願望なども含まれます。

【質問】折れ線グラフについてですが，性別の分け方は生まれもった性別なのか。トランスジェンダーはどちらに入っているのか。

【答え】2004 年からの調査データなのでイギリスもアメリカもトランスジェンダーという概念がなかったので，答えている人が自分の性自認で答えているのか，生物的な性別で答えているのかわかりません。

【質問】日本ではメディアで LGBTQ のキャラクターとして出ていて存在自体は知っている。アメリカでトランスジェンダーの理解が進んでいると示されているが，今の日本のようにメディアで知っているレベルなのか，ちゃんとした理解があるのか。また，それはどのような出来事があって知られるようになったのか。

【答え】1970 年代にオリンピックでメダルを取ったブルース・ジェンナー（William Bruce Jenner）という人がケイトリン・ジェンナー（Caitlyn Jenner）として出てきたんですね。その影響でトランスジェンダーが知られるようになりました。私の年代より上の人にとって，ジェンナーは有名でした。シリアルの箱に「これを食べると僕のように強くなれるぞ」と写真が貼られていて有名な人だったんですが，その人が急に 5 年前にケイトリンになって出てきたのがショックでした。パリのテレビで取り上げられるようなセレブな一家の娘さんと結婚している人で有名だったので全米が驚いたんです。この人はとても保守的な人で，保守系の人にも有名だったんです。ケイトリンの前にもカミングアウトした人はいましたが，あまり影響はなく話題になりませんでした。ケイトリンはバニティーフェアという雑誌のカバーに載っていて，全米が驚きました。2015 年，2016 年に自分の戸籍上の性別ではないトイレを使ってもいいという法律ができて，色々な州で議論が起こっています。

【質問】いじめの率のグラフについて，縦軸の単位がわからない。

【答え】これは%です。全体の 5%がいじめられていない，全体の 35%が差別でいじめられている，

という見方です。

【質問】トランスジェンダーのスライドで，いじめられていたから健康を害するというのは理解できるのですが，たばこ，マリファナなどの使用が同じようなパターンになるということでしたが，日本ではどちらかというと，（被害側ではなく）いじめっこややんちゃな子がするようなイメージなのですが，アメリカでは感覚的にすんなりくるような文化なのでしょうか。
【答え】大抵は反社会的な行動というといじめっ子の方が多いと思うかもしれませんが，疎外されているいじめられる方もこのように問題行動を起こすことがあるのです。どうしてこのような行動を起こすのかというと，お酒やマリファナをストレス解消の道具として使うことがあるからです。
　日本ではいじめられていると一人になって，家にこもるからでしょうか。一人だとマリファナはゲットできないですよね。ストレスに対するコーピングの仕方が，文化的に違うのかもしれません。
【葛西補足】日本では過食やネット依存になってしまうこともありますね。

【質問】いじめの形として，無視するとか仲間はずれにするといったことは調査で聞かないのか。
【答え】いじめのデータの多くは身体的なことだけを聞いていて，仲間はずれにされる，孤立させるというのは入っていません。インタビューをするとたくさんのいじめが挙げられますが，先ほど示したデータでは身体的いじめだけです。

【質問】この調査の中でも身体的なものだけが認識されているのだとしたら，年々減っているのはいじめの質が変わっている可能性もあるのではないかと思うがどうか。
【答え】これに関しては，ハラスメント，いじめ，いじめ被害（victimization）など定義が違っていて広いので，この研究者がどれを使っているのか，私の研究ではないので覚えていないのですが，この調査の中では身体的だけでなく持ち物が盗まれたり持ち物が壊されたり，なども入っています。

【質問】データ処理の仕方について，退学の数値をどう処理していますか。いじめや LGBTQ と退学との関係を教えてほしい。
【答え】これはとても大切な点です。アメリカでは 16 歳まで学校にいなければならないという決まりなのですが，16 歳までに学校をやめてしまう子は多いんですよね。特に人種的少数派，民族的少数派，LGBTQ といったマイノリティの子は退学してしまう子が多いのです。その子たちはデータに入っていないので，実際にはもっとリスクが高いかもしれないということが言えます。先ほどの研究は学校を通しての調査結果なので，そういう子たちには答えてもらえていません。学校を通さない調査方法というのがないので，その点は困っていることです。

【休憩】

５．LGBTQ といじめ対策

これから，では実際に何ができるのかという話になるのですが，いろいろな質問から研究者の方が多いのかなと思いました。名刺をお渡ししますので，何か質問があったりこのジャーナルが見たいとかがあったりしたら言ってください。

ここからは，どちらかというと教育者や政策を立案する人々，あるいは学校の中にいる全ての大人，給食の担当やスクールバスの担当も含めてすべての人に関係します。スライドでは三角形で示していますが（スライド 18），その一番下が基盤となるところで，ポリシーです。それがどんなものかというと，ローカルな市や町などのガイドラインや規制やルールのことで，公に決まっているものから決まっていないもの，公式や非公式も含めてポリシーというものに含めています。その次に来ているのは教員研修で，そこには全部大人が学校の中でできることというのが入ります。それは，こちらから積極的にできることだからです。それができると，すべての子どもたちは学校が安全な場所だ，安全な環境だと思えるようになると思うのです。

5-1.ポリシーの重要性

ここに色々ポリシーが列挙されています。その中で，いじめのバイアスになりそうな特性のリストがポリシーに含まれています（スライド 19）。列挙しているリストがどこからきているかというと，人権課題からきていて，日本にも人権課題はありますよね。たとえば人種や民族に基づいて被害を受けてはいけないという法律があります。そのような法律のところに性的指向や性的表現を入れるか入れないかというのは議論がされていて，それぞれの州や地方によって法律に入れるかどうか議論がされています。ただ，全米というのはないです。このリストに列挙されるかどうかはとても重要です。どうしてかというと，生徒自身が自分たちにその権利があるということがわかるし，先生や管理職の方々もそれを実行することが大切なんだということが分かるからです。スライドの地図で（スライド 20），☆マークをつけた 19 の州では，列挙している中に性的指向や性自認などの表現が入っています。◎の州，フロリダとアラバマはリストを列挙しているけれど性的指向などが入っていないところ，そのほかの州は列挙していないところです。偏見差別はだめですよというけれど，どんな人権課題があるかを挙げていないところです。この地図で，アメリカの中でも多様だということが分かってもらえたと思いますが，次の話は，そのように政策やポリシーがあると子どもたちの安心感や達成感に関連していくという話です。

生徒たちからの様々なデータで，「あなたの学校にはそのようなポリシーがありますか」，「どんな人権課題がポリシーに含まれていますか」と聞いて，含まれている学校では安心感や学業の達成感が高いという結果が出ています（スライド 21）。一番上は生徒間の違いを比較していたのですが，次のところでは色々なデータが集まってきたので学校間の違いを見るようになってきました。やはり学校間ですごく違うというのがわかったのと，ポリシーの中身は違うにしても，ポリシーにセクシュアルマイノリティが入っていれば LGBTQ について資源や支援があるため，子どもたちが安全を感じているということで違いがありました。州ごとの比較は一つしか研究がないのですが，州の比較によってリストに挙げている州と挙げていない州では，挙げている州の方がバイアスが少なくてハラスメントも少ないという結果になりました。

それぞれ先ほどからのは質問紙で聞いているものですが，それぞれ細かいことについてもっと知りたい場合は連絡してください。とてもたくさんの研究をまとめているものなのでお渡しします。

ポリシーというのは重要で，学校が何をするのかをすごくはっきりさせてくれているのですが，日々の子どもたちの体験，つまりハラスメントとかサポートとかを受けているのかなどが，子どもたちの精神的な健康に関係しているということが分かっています（スライド 22)。回帰分析を使って分析すると，ポリシーがありますかという質問と，子どもたちが学校を安全だと思っているかというのはとても関係が高いと言えます。しかし，媒介変数としていじめられている，サポートしてくれる先生がいるなどいったデータを入れると，ポリシーじゃないほかのところが関連しているということが出てきます。つまり，ポリシーがあるというのは管理職の人にとってはとても重要なことで，なにをするのかがはっきりしてくるのですが，子どもたちにとっては日々のことの方が重要なんですね。なので，私が興味を持っている教員研修についてここから話をするのですが，この参加者の方には教員に対する研修について研究している方もいてすごいと思います。実はアメリカではあまりいないんです。

5-2.教員の役割

個々の生徒のデータだと，サポーティブな支援をしてくれる先生がいれば LGBTQ の生徒の学業や健康へのリスクを止めることができるし，ハラスメントがあったときに教師が介入してくれると生徒が安全だと感じ，より適応できます（スライド 23)。これは明白なことですよね。明らかなことなんですが，先生にどうしたらいいのか，というのをトレーニングするのは難しいことだったりします。私の経験からすると，すべての先生は正しいことをしたいと思っているのですが，どうやってしたらいいのかわからないことが多いです。人権を学校で教えるというのはアメリカでは無くて，多様性について先生たちも研究しなければならない。ポリシーを作らねばならないんですね。

【葛西先生つぶやき】ポリシーを作るの好きなんですね。

【答え】ポリシーを作ると変わるでしょう？

先生たちからのデータなんですが，先生たちは，管理職の人がいじめ問題を真剣に取り上げるんだと思ってくれると，バイアスに基づいたいじめをより真剣に取り扱い，より介入しやすいのです（スライド 23)。先生たちからよくコメントをもらうのは，たとえばクラスで同性愛について差別的な発言があったとして，自分は数学の先生で今授業しているが，では授業をやめて介入するのか，それともこのまま授業を続けるのか。あと 30 分しかなくて生徒 30 人を前に自分はどうしたらいいのかという質問をもらいます。その時に先生が絶好のタイミングだと思ってそれについて教えると，保護者からあるいは上司から「授業中になんでそんなことをしているんだ」と言われないか，という相談もあります。だから，管理職がそういう対応を支持しているだとか，そのようなポリシーがあるということはとても大切なのです。

5-3.こども主体の対策

最後に三角形の一番上ですね。基礎のポリシーがあって，先生ができることがあって，子どもたち

が日々の体験の中でできる介入を取り上げます。本当は，この部分は何時間も説明できる内容なのですが一枚のスライドにギュッと集めているところです。例えば，こういう組織は日本にはあるのでしょうか。学校の中でセクシュアルマイノリティに関するクラブというような組織があれば，それは子どもたちにとってはとても安全で，横のつながりも持てるという学校になっています（スライド 24）。

大学などで LGBTQ に関する機関に所属している方はいますか？

そのような高校があることを知っているという方はどうですか？

これについては 20 以上の研究があるんですが，ゲイと異性愛の人とが一緒のグループがあるととてもいいという研究結果がたくさんあります。例えば人種についても同じで，黒人のグループとヒスパニック系のグループがあると子どもたちの精神的な幸福感に関係してきます。

これはそれ以外の学校環境全てに関することなのですが，さまざまな情報やカリキュラムや資源のことですが，例えば LGBTQ に関する情報とか，どこに行けば支援をしてもらえるのかを知っているかどうかということですね。図書館に本があるとか，セクシュアルマイノリティに関するポスターが貼ってあるだとか，それだけでも，自分たちのことが何か表現されているということで安心感を与えます。多数派じゃない人たちについての内容がカリキュラムに入っているということが，学校の安全性や適応に関連するという結果もあるのですが，一方でそういった内容を盛り込むことに反対意見もあるのです。自分自身のことがカリキュラムに入っている，図書館に本があるということは，自分はここに属していていい，私はそこの学校の一員であるという感覚につながって，適応感が上がるんです。いま議論があるところですが，大抵の子どもたちは LGBTQ について学ぶのは，保健体育のエイズのところで習うだけなのです。だけど，もしもそれだけだと，少ししか情報がないことになります。HIV と LGBT についてのトピックしか触れないので，LGBTQ の人たちが社会にどれだけ貢献しているのか，どれだけ影響を与えているのかということは全く情報がないままになってしまいます。例えば，私が生徒だった時に黒人について習ったのは，黒人は昔奴隷だったということだけです。ヒスパニック系について習ったのは，昔メキシコで戦争があってアメリカが勝ったということだけでした。黒人は奴隷だっただとかメキシコのことをやっつけただとか以外のたくさんのことも，子どもたちは知るべきだというポリシーを作ったんですね。そういう教科書を作らなければならない，採用しなければならないというポリシーを作っているところですが，それも議論があるところです。

結論なんですが（スライド 25），全体的なこととして，まずは社会的な部分でインクルーシブな，色々なものを含めるようなポリシーを作る，管理職にもわかってもらうようなポリシーを作ることが大切です。それに基づくと，学校の中にいる人たちが積極的な行動をするということの基になります。ポリシーがあり，先生たちも積極的にやっていこうという気持ちになれると，子どもたちは日々を安全で安心して過ごし，学校に行こう，学校が楽しいという気持ちになるのです。今日示したのはアメリカの大きなデータをギュッとまとめて示したという感じなので，ここからは，皆さんが日本の学校で使えるのか，あるいは日本とは違うのかなど，そういう意見が得られたらと思います。

【戸田】

ポリシーの話がいろいろあったと思います。2013 年，いじめ防止対策推進法が施行されました。

この講演ではポリシーということで語られていますが，先生方に日本の状況をうかがってラッセル教授にお知らせしたいなと思います。

教えていただきたいのですが，学校教育法に定める日本の学校に勤めている先生はいらっしゃいますか？　その中で，いじめ防止対策推進法に基づいて，いじめ防止基本方針を学校でお持ちの所は？（多数挙手）　では，その中で毎年その方針をリニューアルされている先生，うちの学校は毎年，教員集団，子ども，保護者と話し合って毎年方針を更新している先生は？　ゼロなんですね。　では，いじめ防止基本方針を作る時にほかの学校の方針をコピーせず，自分の学校のオリジナルを作った学校はありますか？　ゼロなんですよ。

【講演者から質問】学校で作りますよね，それは保護者や全ての先生に知らされているのですか？

【戸田】文科省の課長の講演の中では，いじめ防止基本方針を「学校でネットに挙げる」ようにと言われているんですね。いじめ防止基本方針を先生方の中の学校で，ネットに挙げているよという学校は？　ここでは，２つか３つです。

【講演者】アメリカでは毎年ポリシーを作り，学生手帳に書くのと，ウェブサイトに挙げなければならないという決まりがあります。

【戸田】ポリシーということで，ラッセル教授から大事さが語られていました。それは，「一度作ればいい，どこかにあればいい」ということではないのです。自分たちで，LGBTQ など新しい問題が出てきたときにそれを含めて見直しをして，見直しをするときにより多くの人を巻き込んで，より多くの人が見られるようにして，ということが求められているのです。けれども現実は，今日来てくださった先生方は意識が高い先生だと思いますが，その先生方の学校でさえもこういう状況だということです。おそらくほとんどの学校で，うちの附属学校でもそうだと思いますけれど，私の関わったところでも，最初の年は一生懸命な先生がいたためオリジナルのものを作ったのですが，その先生がいなくなったら毎年同じで，そのままどこにあるかもわからないという状況で，そういうことはあると思います。

本当はここで語られていることは，一見すると当たり前のことなのですが，その当たり前のことが日本中で出来ていないということが言えると思います。

【講演者】一応こういう段階でというふうに言いましたが，ポリシーがなければ教員研修ができないとか，教員研修ができなければ安全な学校が作れないかというとそういうことはなくて，ポリシーは州や地方にはないが，頑張っている管理職の先生がいて，その先生が教員研修をしたりある一人の先生が頑張って安全な学校を作ったりということもあります。私が住んでいる州にもポリシーはなかったりするんです。

【ここで自由討議】

【質問】安全な学校環境の，最後から 3 番目のスライドで，生徒の組織が安全や適応感に関連しているという話がありました。私が通っていた大学でも LGBTQ のサークルがあったのですが，どちらか

というと非公式，非公開という感じで，興味がないとその存在を誰も知らないという状態でした。今の日本はだいたいそういう感じで，あったとしても知らないし，公式で公開であったとしても，自分が入ったらカミングアウトにつながるだとか，逆にそうでない人がその会に入ると，自分もそうだと勘違いされるのではという気持ちがある。だとすると，今の日本はアメリカと違って政策がないので，アメリカのように行っても安心感や適応感にはつながらないのではないか。アメリカの組織にはどういう人が入っているのか，そこに所属している人はどういう認識を周りからされているのか。

【回答】すごくいいポイントで，それに関して長いディスカッションをしたいくらいです。ですが時間がないので短くお答えします。ゲイ・ストレート・アライアンス（GSA）について研究がなされていて，GSA に所属することでいじめのターゲットになるのではないかという考え方もあります。私の研究ではそういった組織があるか，メンバーかどうかを質問していたりするのですが，実はメンバーである必要はなく，そのような組織が学校にあることが違いをもたらしています。

十年前に GSA が最初できたときには異性愛の女の子がほとんどで，「ゲイの友達がいて」という理由で入っていて，でもゲイの友達は一切来ないというようなクラブだったんです。だから，みんなが行かなかったり知らなかったりしても，それが学校のクラブとして認められてその組織が存在していることが大切で，それがいい雰囲気につながるのです。GSA があるということ，そして利用の仕方で，そこでカウンセリングをしたり自分の助けになったりすることもあるし，クラブが啓発的なことをして外に向かって情報を発信して，学校をこうしていこうという使い方，動き方もありますよね。カリフォルニアにいいデータがあって，そのような組織がある学校は全てのいじめが他の学校よりも低いという結果がでています。それぞれの生徒個々人が安全だと思ってもらうことは大切だし，学校全体としてそういった方略があることが大切で，そうすると，生徒が学校を安全だと感じることもあると思います。もちろん感じないこともあるだろうとも思います。

【質問】教員研修のスライドで，教員研修などで同性愛の子どもに対する対応のマニュアルが世界でつくられるという情報を得たのだが，先生が研究している学校にマニュアルが存在するか。たとえば，同性愛の子どもに対してサポーティブであるためにはというカナダなどのマニュアルなどがあるとのことだが。

【回答】アメリカからというのはありませんが，色々なところから出ていることはあります。NGO などの団体から。日本も文科省から教員に対して出ています。先生もセクシュアルマイノリティのいじめがあった際にどうしたらいいかということに関するワークショップをしています。

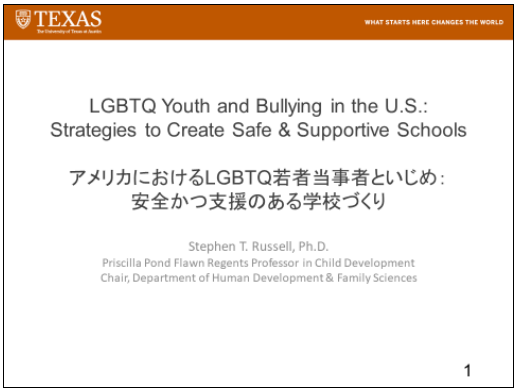
【質問】教員研修，学校，地域　総括的な政策のことで確認。全体的な話で聞きたいことだが，教員研修をするだとか，学校でこういう政策を立ち上げるという際に，親，PTA，教育委員会から横やりが入ってできないということがあるのではと思う。そういうところに対してどういう風に対処すべきか。どういう方法があるのか。教員に研修をするのと同時に親に対して研修をする必要があるのではないかと思うがどうか。

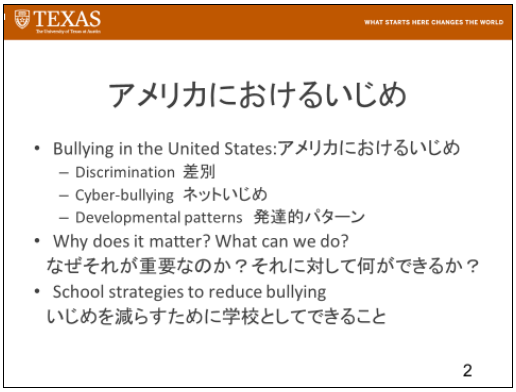
【回答】だからこそ，ポリシーがあるということが大事なのです。こういうことをするというと怒っ

てくる親もいます。そのために私はこのような研究をしていて，データを使ってこんなにリスクがあるんだ，だからポリシーを作らなければならないんだという説得材料になるから，このような研究をたくさんしています。最近出た本なのですが，この本の中にも地域で何ができるかということが書いてあります。たとえば，学校や州でポリシーを作ろうとなると，アメリカ国民全体でみると LGBTQ に対して肯定的という人たちの方が多いのに，反対派の人たちの方が声高に運動をするのです。だから，そういったときにどう対応したらいいかということが書いてあります。LGBTQ のことを含めようと思わない人たちは自分たちの価値観や信念や良心，道徳心に基づいて動いていて，含めようと思う人は子どもたちの精神的な健康や幸せのことを思っているわけですね。

カリフォルニアに 25 年前に住んでいた時に初めて性的指向とジェンダーアイデンティティについての法律が通ったのですが，その時に劇的に変わったように感じて，それまではそうした生徒へ何かをしたいと思っていた先生たちが自発的にやっていたものが，やらなければならないという風に変わったのです。それで，先生の価値観や道徳がどうだとかではなくて，やらなければならないことだと研修ができるようになったので，すごく変わりました。

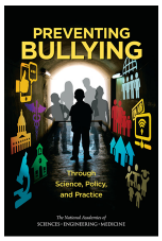
先生たちの意見が違うというのは仕方ないことです。いろいろな意見や価値観があってよいわけですが，決まっているということは，子どもたちが安全で，学校に行けるという，いじめがない環境を作るということができるということなんです。そしてそれは先生の役割で，安全な環境を作ることが先生の役割なのです。先生や管理職の人たちの役割は子どもたちが学校に行けて卒業できるようにするということなので，それをしてくださいということに変わった。だからたとえば全員にゲイの人たちを好きになってくれということではなく，ゲイの子どもたちが安全に学校に行けるということが大切で，そういう学校の環境を先生方が作ってくださいと決まって，それができるようになったことが大きいのです。





TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

アメリカにおけるいじめ



- Significant public concern
- 社会的に関心が寄せられている
- National Academies Report 2016
  - Little attention to motives for bullying, and discrimination
- 2016年のNational Academiesからの報告
  - いじめや差別の動機にはあまり注意をむけられていない
- In 2000s, many new state and local laws and policies
- 2000年代には、新しい州や地方の法律や政策が作られた

3

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

California Health Kids Survey, 2009
234,947 students; grades 7,9,11

Type of bullying	Percentage of Students
Not bullied いじめられていない	62.6
Any bullying いじめられた	37.4

American Journal of Public Health, May 2012

4

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

California Health Kids Survey, 2009
234,947 students; grades 7,9,11

Type of bullying	Percentage of Students
Not bullied いじめられていない	62.6
Any bullying いじめられている	37.4
Discriminatory bullying 差別的いじめ	27.4 +75%
Race or ethnicity 人種・民族	14.3
Religion 宗教	9.1
Gender ジェンダー	10.3
Sexual orientation 性的指向	7.5
Physical/mental disability 心身の障害	4.9

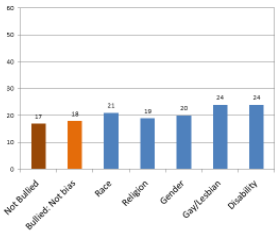
American Journal of Public Health, May 2012

5

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Grades below C 低学力

Not bullied	いじめられていない
Any bullying	いじめられた
Race	人種等いじめ
Religion	宗教いじめ
Gender	ジェンダーいじめ
Sexual orientation	性的指向いじめ
Disability	障害いじめ



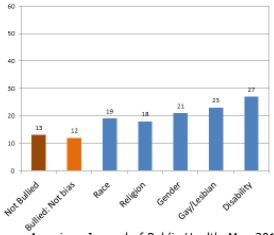
American Journal of Public Health, May 2012

6

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Binge drinking 暴飲

Not bullied	いじめられていない
Any bullying	いじめられた
Race	人種等いじめ
Religion	宗教いじめ
Gender	ジェンダーいじめ
Sexual orientation	性的指向いじめ
Disability	障害いじめ



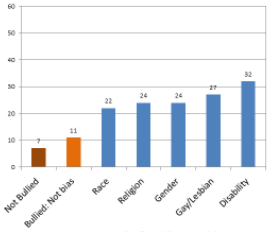
American Journal of Public Health, May 2012

7

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Missed school: unsafe 欠席：危険な学校環境

Not bullied	いじめられていない
Any bullying	いじめられた
Race	人種等いじめ
Religion	宗教いじめ
Gender	ジェンダーいじめ
Sexual orientation	性的指向いじめ
Disability	障害いじめ



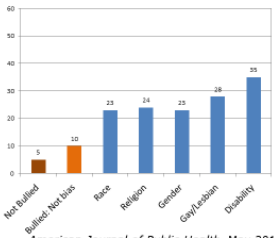
American Journal of Public Health, May 2012

8

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Threatened with weapon 武器で脅された

Not bullied	いじめられていない
Any bullying	いじめられた
Race	人種等いじめ
Religion	宗教いじめ
Gender	ジェンダーいじめ
Sexual orientation	性的指向いじめ
Disability	障害いじめ



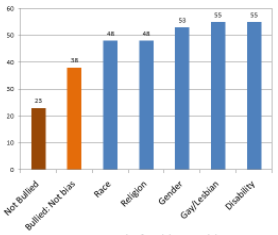
American Journal of Public Health, May 2012

9

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Depressed 抑うつ

Not bullied	いじめられていない
Any bullying	いじめられた
Race	人種等いじめ
Religion	宗教いじめ
Gender	ジェンダーいじめ
Sexual orientation	性的指向いじめ
Disability	障害いじめ



American Journal of Public Health, May 2012

10

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

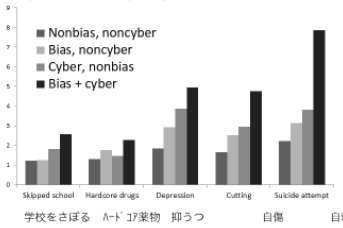
Cyber Bullying　ネットいじめ

- It is perceived as / may be anonymous
  匿名と思われている／おそらく匿名
  - Allows for more aggressive / cruel behavior
    （より攻撃的で残酷な行動を許してしまう）
  - Non-verbal cues are absent（非言語的てがかりがない）
- The potential audience is large and unknown
  潜在的な観衆は、多数で、知らない人たち
- The evidence (a website post) may be permanent
  証拠（ネット投稿）がおそらく永久に残る
- It is present 24 hours a day
- 1日24時間存在する

11

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Cyber Bullying　ネットいじめ

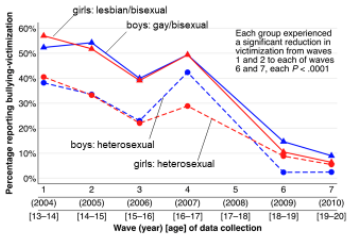


Dane County Youth Survey, 2009
17,366 students; grades 7,9,11

Journal of Adolescent Health, April 2012

12

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD



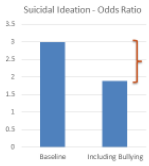
それぞれのグループの被害状況は年を追うごとに減少している

Robinson, Espelage, & Rivers, *Pediatrics*, 2013, p.5を元に作成

13

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Transgender youth
トランスジェンダーの若者



- First US population studies
  - 28,856 California students
- 初めてのアメリカでの研究
  - 28,856人のカリフォルニア在住の生徒
- 3 times higher suicidal ideation for transgender youth　3倍の自殺念慮
- Dramatic reduction in risk controlling for bullying　いじめを統制したらリスクは劇的に減少する
- Same patterns for: alcohol, cigarette use, and marijuana　同じことがアルコール、たばこ、マリファナ使用にも当てはまる

Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 2017
Journal of Adolescent Health, 2017

14

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

アメリカにおけるいじめ

- The majority of students' reports of bullying have prejudice or discrimination as a motive　いじめを報告した生徒によるとその動機は偏見や差別であることが多い
- The impact of bullying is greatest:
  - When it is discriminatory
  - For mental health and behavioral health (rather than academic achievement)
- いじめの影響は、以下の場合にもっとも悪い
  - 差別的であるとき
  - 心理的健康や行動的健康に影響（学業成績より）

15

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

アメリカにおけるいじめ

- Cyber + discriminatory bullying has dramatic influence on mental health　ネットで差別的いじめが心理的健康に最も影響がある
- Although bullying declines across the adolescent years, disparities in bullying are consistent from adolescence into young adulthood　思春期では、年齢が上がるにつれいじめは減少するが、いじめにみられる不平等は思春期から成人前期まで続く
- Reducing bullying could greatly reduce the health risks for transgender youth　いじめを減らすと、トランスジェンダーの若者の健康リスクを減らすことができる

16

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Why does discrimination matter?
なぜ差別を問題にしないといけないのか？

心理的 – Psychological

対人関係 – Interpersonal

社会的 – Social

Discrimination marginalizes people based on personal differences
差別は、個人差で人を疎外する

17

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

What can help reduce bullying?
いじめを減らすために役立つことは？

安全な学校環境 – Safety

教員研修 – Teacher Training

包含的な政策 – Inclusive Policies

18

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Inclusive Policies 包含的な政策

- Enumerated policies: list of traits or characteristics that could be the basis of bullying
  - Race/ethnicity
  - Actual or perceived sexual orientation, gender identity or expression
- 様々な政策：いじめのバイアスとなりそうな特性、特徴のリスト 人種・民族、実際あるいはそう見える性的指向、性同一性、性表現
- Enumerated policies provide:
  - Students with understanding of their rights
  - Faculty and administrators with tools to implement policies
- 様々な政策が提供するもの：自分の権利を理解する生徒、政策を実行する方策をもっている教員や管理職

19

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Inclusive Policies 包含的な政策

Source: Stopbullying.gov: Policies & Laws.

20

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Inclusive Policies 包含的な政策

- Comparing students: having an inclusive policy is associated with safety and achievement (Horn & Szalacha, 2004; Hatzenbuehler et al, 2013)
- 生徒間比較：包括的政策は、安心感や達成と関連する
- Comparing schools:
  - Not all schools are equal: There is significant variability across schools in LGBT resources and support and in perceptions of LGBT safety
  - % students who reported having resources and support, and % who learned about LGBT issues in classroom – predict frequency of bullying (Russell & McGuire, 2008)
- 学校間比較：すべての学校は均等ではない。学校によって、LGBT資源や支援、LGBTの安全性に関してかなり違いある。資源や支援があると答える生徒の割合と、LGBTに関して授業で学んだ生徒の割合は、いじめの頻度を予測する
- Comparing states: students in states with enumerated laws report fewer bias remarks, less harassment (Kosciw et al, 2008)
- 州間比較：様々な法律がある州の生徒は、バイアスが少なく、ハラスメントも少ない

21

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Inclusive Policies 包含的な政策

- However .... daily experiences (e.g., harassment; support) are more strongly linked to well-being (Russell & McGuire, 2008)
- しかし…日々の体験（例、ハラスメント；支援）が、健康的幸福と強く関連している
- Thus – inclusive policies are only a first step that provide the basis for other strategies…
- そのため－包含的政策は、他の方策を講じるための基礎を提供する第1歩でしかない

22

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Teacher Training 教員研修

Evidence from Students:生徒からのデータ

- A supportive teacher is a protective factor for LGBTQ students' academic success and health risk (Blake et al, 2001; Russell, Self & Truong, 2001)
- 支援的な教師は、LGBTQの生徒の学業成績や健康リスクに対して防御要因となる。
- Students feel safer and do better when teachers intervene in harassment (O'Shaughnessy, et al, 2004)
- 教師がハラスメントに対して介入すると、生徒は安全だと感じ、より適応する.

Evidence from Teachers: 教師からのデータ

- Teachers take bias-based bullying more seriously – and are more likely to intervene – when they felt school administrators take it seriously (Kosciw et al, 2009)
- 教師は、管理職が問題を真剣に取り上げると感じると、バイアスに基づいたいじめをより真剣に、取り扱う（またより介入しやすい）。

23

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

School Safety 安全な学校環境

- Student clubs / organizations are associated with perceptions of safety and connections 生徒のクラブ/組織は、安全や繋がりの感覚と関連している
  - High school gay-straight alliances; ethnic group organizations; religious groups - have an effect on the campus diversity climate and to emotional & behavioral health and academic success (Szalacha, 2003; Toomey & Russell, 2011)
  - 高校のゲイ-ストレイトアライアンス、人種グループ組織、宗教的グループなどは、校内の多様性の雰囲気に効果があり、また情緒的、行動的健康や学業成績にも効果がある
- Information / resources / curricular inclusion 情報/資源/カリキュラムへの統合
  - Ethnic studies or LGBT inclusion in curriculum is linked to school safety and adjustment (Romero & Ochoa, 2006; Blake et al, 2002)
  - カリキュラムに人種研究あるいはLGBTが含まれていると、安全な学校や適応と関連している
  - One of the strongest predictors of safety is knowing where to go for information and support (O'Shaughnessy et al, 2004)
  - 安全のもっとも強い予測変数は、情報や支援が提供してもらえる場所をを知っていることである。

24

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

Conclusion 結論

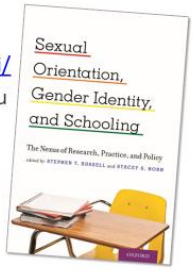
There is strong research evidence that policy strategies at multiple levels are effective to reduce bullying:様々なレベルでの政策を作ることは効果がある

Level of Influence	Policy / Practice Strategy
Psychological 心理的	Safety 安全な学校環境
Interpersonal 対人関係	Teacher Training 教員研修
Social 社会	Inclusive Policies 包含的な政策

25

TEXAS WHAT STARTS HERE CHANGES THE WORLD

- http://sites.utexas.edu/sogi/
- stephen.russell@utexas.edu



30% discount code: ASPROMP8

26